

2023年11月19日 説教『わたしが命のパン』

高橋克

樹牧師

聖書 出エジプト記2章1〜10節、ヨハネ福音書6章27〜35節

ノーベル賞作家のカズオ・イシグロに「わたしを離さないで」（早川文庫）という作品があります。臓器提供のために創り出された人間のクローンが、幼少期から16歳までの期間を外界と隔絶された施設で育てられるという物語です。映画化もされています。金持ちが自分の細胞でクローン人間をつくるという物語です。金持ちはいずれ自分が年老いたときに、自分の臓器に不具合が生じるを見越して、自分のクローン人間を作って、そのクローン人間を外界と隔絶された施設で育てるわけです。もちろん、そこで学習し生活するクローン人間たちは、自分たちが臓器提供者として育てられていることに気づいていませんが、次第にその過酷な運命に気づいていくわけです。

臓器移植法が日本で成立して20年以上経ちますが、臓器移植の世界の実際は闇のままです。当初は、臓器移植された人のニュースが何本か出ましたが、その後、一切出てきません。おそらく、術後は免疫抑制剤を使い続ける必要があるために、なんらかの感染症に罹患して、臓器提供を受けた人がなかなか生き続けることができなくて、厚生労働省も臓器移植の提供者が少なくなることを懸念して、情報を公開したくないために、臓器提供を受けた人のその後のことがほとんどニュースにならないのだと思います。

このように、人間の体は、自分以外の臓器が体の中に入ってくると、拒絶反応を起こしてしまいますが、クローン人間だとその拒絶反応が起きないわけです。このような生命の不思議な成り立ちをベースに、カズオ・イシグロは「わたしを離さないで」という小説の中で、近い将来に起こりうることで、臓器移植の問題を描いたのです。

ヨハネ6章27節の言葉は『朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくなるらないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい』というイエスの言葉を読む時、永遠の命ということ、生物学的に永遠に生き続ける命のことを思い浮かべる人もいるでしょう。理屈的には、たとえ、身体がクローンに変わっても、自分を生きてきた記憶が一貫しているならば、人間は不老不死を手に入れることができるわけです。人間の身体が永遠に生き続けることは細胞ですから、ありえないわけで、クローンを作成しておいて、自分が生きてきた記憶をそのまま移植できたならば、人間は不老不死を手に入れたことになるのです。

生命倫理の講義の際に、臓器移植の話をするのですが、多くの学生は自分が脳死状態になったら、自分は臓器を提供しますという方が多いです。自分が死んだあとならば、人の役に立つならば臓器を提供するのは人助けだと理解しているからです。でも、臓器移植の实情を話すと、学生さんは考え直すことがあります。私は端的に言えば、臓器提供もしたくありませんし、臓器提供も受け

るつもりはありません。何故かと言えば、自分が臓器提供を受けることをもし希望するならば、それは私が誰かの死を待っていることになるからです。私が臓器移植を受けないと考えているのは、他人の死を待っていて、自分の命を長らえよとすることは単純に、そのような生き方はしたくないと考えるからです。

イエスの時代にも、永遠の命のことが話題になっていたことを見ると、不老不死のことが人間の欲求として潜在的にあったことを表しています。それに対して、イエスは『朽ちる食べ物のためでなく。いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい』と言います。

朽ちる食べ物とは、この地上の食べ物のことです。イエスは、なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくならない永遠の命に至る食べ物のために働きなさいと言うのですが、このなくならない食べ物、永遠の命に至る食べ物とはイエスご自身のことです。それは父なる神が天から与えるパンでもあるのです。そして、このパンとしてのイエスを食べるとき、私たちは不老不死としての永遠の命ではない、真実に生きることのできる命としての自分の人生が切り拓かれていくのです。

神がくださるパンとしてのイエスを受け取り、永遠の命をいただいて、神の祝福の中を歩みながら、神の栄光を現わしていくことが私たちキリスト者の務めとなってくるわけです。永遠の命に至るように、神がお遣わしになった者を信じることが、神の業であるということをおっしゃるわけです。

ところが、イエスに付き従ってきた群衆は、自分たちがイエスを信じることができるようになるのを、しるしを見せてください、と言って、荒野でマナを食べた故事に倣って、自分たちに永遠の命に至るパンをいつも私たちにくださいと願ったのでした。

それに対してイエスは、35節で『わたしが命のパンである。わたしのものに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない』と言うのです。聖餐式で私たちはイエスの体をパンとしていただくわけですが、そこで私たちはイエスを信じることが、パンを食べることで象徴的に自分の身体に取り入れているわけです。

イエスの体を象徴的に表すパンを食べることによって、イエスの体を取り入れるわけですが、イエスの体は私たち信者の中で拒絶反応を起こすことがなく、かえって私たちを真実なる道へと導く栄養となるのです。

この世の臓器移植は、免疫抑制剤を使わざるを得ないので、いずれ感染症によって臓器移植そのものが無駄になってしまうのですが、イエスが「わたしが命のパンである」と言っているように、イエスご自身が神の意志そのものになっているので、神の意志が私たちの生きる道筋の方向性を定めていくのです。